

---

# ある雨の日に

東風こち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある雨の日に

### 【Nコード】

N9735E

### 【作者名】

東風こち

### 【あらすじ】

ある雨の日の出来事・・・私の記憶の中に埋もれていたそれは何だったのだろうか？

その日はとても暑い、寝苦しくなりそうな夜だった。

外は、なんだろうか、虫が鳴いていた。しかし、その鳴き声とは普段聞くことのできないであろう悲鳴！怒号！それとも苦しみを押し出しているような、そんな鳴き声であった。

「錯覚か・・・」

私は、そんなことを呟きながら、外の空気を吸おうと窓を開けた。

ザーザーザーザーザー

雨か・・・

いつの間にか降っていた。

窓を開けた私の顔にも、雨粒が降り掛かってくる。

「いつの間に・・・ん？」

よく見ると、遠くの空が光っている。

「雷か、あの山の向こうは大丈夫か？」

あまりにも激しい雨音にかき消されているのか、雷の音は聞こえてこないが、鋭く光るこの雷は・・・。

「そうか、そうなんだな・・・」

ふと思い出す、あの雷の光は、どこかで同じ光景を見たことがあった。

ピカッ！　ゴロゴロ・・・　ピカッ！！

そこは蝋燭の光があるだけという、薄暗い部屋だった。部屋の真ん中には大仰な計器やレバーの付いた機械があった。私は・・・、その機械をこれから動作させようとしているところだった。周りには他に人はおらず、目の前にある機械は、スイッチが入ることを今か今かと待ち構えているようだった。

” 起動5分前、関係者は直ちに退避して下さい ”

館内放送だろうか？突然、スピーカーから機械的な声が聞こえてきた。

「そうかつ、そういうことか・・・」

私は、今の放送で、これまでの記憶が甦ってきていた。しかし今はそういったことに思いを馳せている猶予はない状況だった。そして、慌てて部屋から飛び出した。部屋を出ると、そのまま全力で走り出した。こんなことになるなんて、何も考えたくない、今は・・・。

どのくらい走っただろうか、いったいどこまで逃げれば良いのか、それすらも分からなくなりそうなくらい長く変化の無い廊下を、とにかく走っていたが・・・。

” 起動1分前、カウントダウンに入ります ”

とうとうここまでできたか・・・、どうやらもう助かりそうにないな・・・。

そんな不吉な予感が胸をよぎったちようどその時、

「よお、そんなに急いでどこへ行こうってんだい？」

目の前に急に現れたのは、

「おまえは・・・」

「なんだよ、幽霊でも見たような顔して・・・どうしたんだ？」  
「・・・いや、なんでもない。それよりどうしてここにいるんだ？ここは今危険な状態なんだぞ！」

しかし、そいつは笑みを浮かべたまま、無言で、その場を動こうとはしなかった。

”三十秒前、三十秒前”

しばらくして、スピーカーから制限時間を告げる放送が聞こえてきた。

「ほお、もうそんな時間か。それじゃ俺もそろそろ行くわ。運が良かったらまた会おうぜ」

そう言うや、そいつは指を鳴らして・・・

「消えた！」

一瞬、思考停止になりそうだったが、周りの状況を思い出し、急いで走り出した。

”十、九、八、七・・・”

もうだめか・・・。

”・・・三、二、一・・・”

「ん？」

何も起きなかった。

いや、何も起きないと思ったその一瞬後、何の前触れも無く通路が真っ暗になった。

その直後・・・！！！！

・・・気を失っていたのか。  
そうだった。あの光はあの時の・・・

どうして自分が助かっているのか、あのとき何が起こったのか、  
私は今でも不思議に思う。

誰かに助けてもらったとしか思えないが、周りに誰もいない状況  
で誰があの場合に駆けつけるというのか。

この雨は、いったいいつまで降るのか、まるで私をあざ笑うかの  
ように派手に降り続くのだった。

ー完ー

## （後書き）

これで4作目ですが、読んで頂きありがとうございます

過去に作りかけた作品をとりあえずの形で完結させてみました（ハ

ーハ;;;;

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9735e/>

---

ある雨の日に

2010年10月12日10時12分発行